

ふくしま心のケアセンター
地域アルコール対応力強化事業
(アルコール・プロジェクト)
相双地域におけるモデル事業
平成 30 年度 報告書

相馬広域こころのケアセンターなごみ
(ふくしま心のケアセンター相馬方部センター)

目 次

I. 相双地域におけるモデル事業の概要・・・・・・・・・・	1
1. 本事業の枠組み	
2. 本事業のメンバー	
3. ミーティングの開催	
II. 平成 30 年度の実施内容・・・・・・・・・・	4
1. 地域住民への啓発活動の促進	
1) 教材・シナリオなどのパッケージ化	
2) アルコール健康問題予防啓発キャンペーン	
3) 出前講座での啓発活動	
4) 各種イベント等での啓発活動	
2. 「男性のつどい」の活動強化	
1) 全体活動 「料理」	
2) プロジェクト活動 「木工リーナ」	
3. 保健・医療・福祉関係者の支援力の強化	
1) 雲雀ヶ丘病院での勉強会・事例検討会参加者からのフィードバック	
2) 雲雀ヶ丘病院での勉強会・事例検討会の開催	
3) ふくしま MI 勉強会との協働	
4. 地域連携の強化	
1) 「地域でのアルコール健康問題について考える集い」の開催	
2) 教育機関との連携	
3) 断酒会の開催支援	
III. 今年度の振り返りと次年度に向けて・・・・・・・・	17

I. 相双地域におけるモデル事業の概要

1. 本事業の枠組み

本事業は、平成 26 年度より実施されている「ふくしま心のケアセンター 地域アルコール対応力強化事業」の一環として、相双地域において展開しているモデル事業である。初年度から、図 1 のような枠組みで展開してきた。

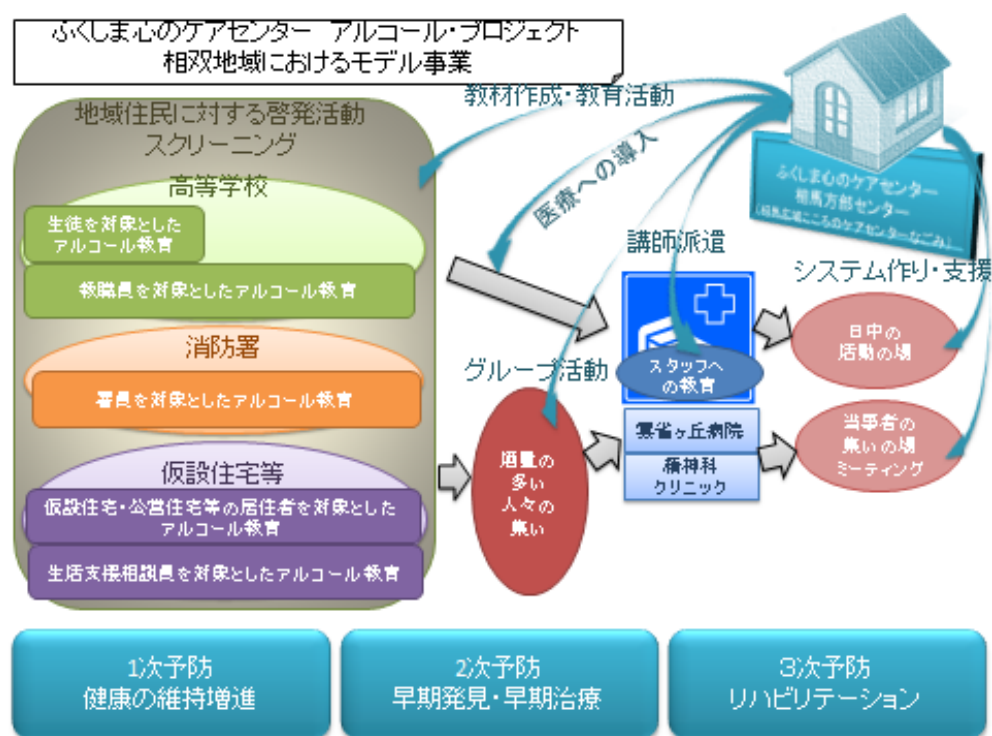


図 1 地域アルコール対応力強化事業相双地域におけるモデル事業の枠組み
(平成 26 年度～平成 29 年度)

モデル事業の開始から 4 年が経過したところで、実施内容やその結果を振り返り、この地域において今、求められているものは何かを再確認した。そして、今年度より、「やってみる！ 出向いていく！ つないでいく！」をスローガンに掲げ、①地域住民への啓発活動の促進、②「男性のつどい」の活動強化、③保健・医療・福祉関係者の支援力の強化、④地域連携の強化、という 4 つの柱から活動を計画し、実施していくこととした（図 2）。

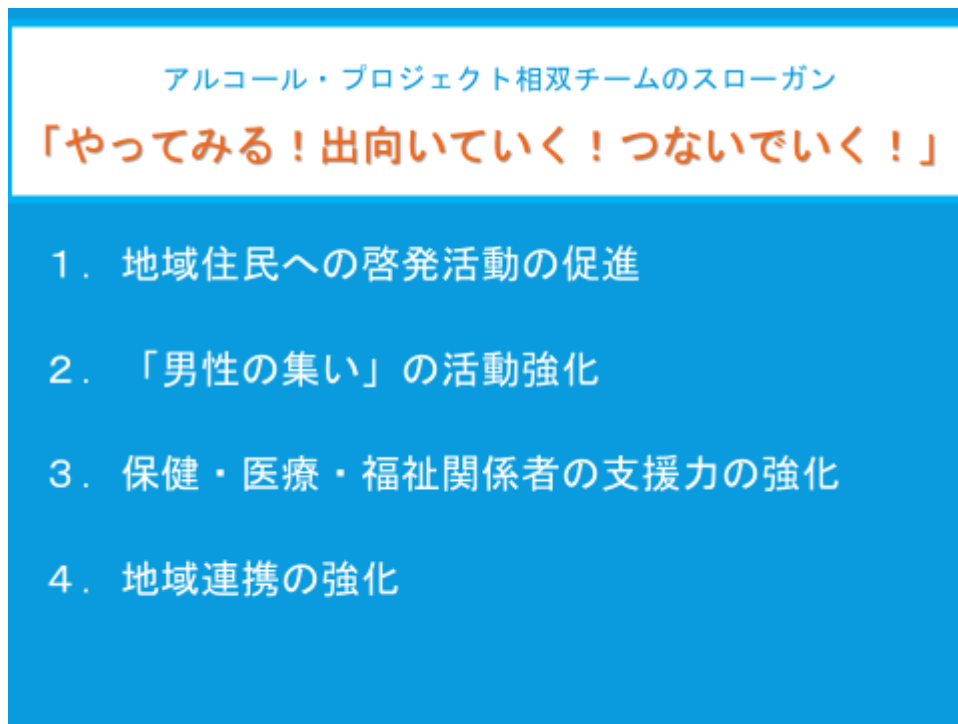


図2 地域アルコール対応力強化事業相双地域におけるモデル事業のスローガン
(平成30年度～)

なお、NPO 法人相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会 相馬広域こころのケアセンターなごみ（以下、「なごみ」とする）は、一般社団法人 福島県精神保健福祉協会より、ふくしま心のケアセンター相馬方部センターの業務委託を受けて、本事業を実施している。

2. 本事業のメンバー

平成30年度は、下記のメンバーにて活動を行なった。

- 大川 貴子 （NPO 法人相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会、福島県立医科大学看護学部）
- 米倉 一磨 （相馬広域こころのケアセンターなごみ）
- 工藤 慎吾 （相馬広域こころのケアセンターなごみ）
- 田中 久美子 （訪問看護ステーションなごみ）
- 坪井 恵美子 （訪問看護ステーションなごみ）

3. ミーティングの開催

本事業のミーティングは以下7回、開催した。

第1回	7月12日(木)	17:30～19:45
第2回	8月6日(月)	17:30～19:45
第3回	9月11日(火)	17:30～19:30
第4回	10月19日(金)	17:30～19:00
第5回	12月6日(木)	17:40～19:10
第6回	2月14日(木)	17:00～19:00
第7回	3月29日(金)	17:00～18:30

Ⅱ. 平成 30 年度の実施内容

1. 地域住民への啓発活動の促進

1) 教材・シナリオなどのパッケージ化

一般住民向けにアルコール健康問題について説明するにあたり、参加者が興味や関心をもって学べるツールを作製することを目的とし、これまで出前講座等で使用した教材をまとめてパッケージ化を行った。教材としては、アルコール体質試験パッチ・精神保健福祉センターや酒造会社で作製しているパンフレットを透明な封筒に入れ、連絡先が分かるようになごみの連絡先を明記している。初めて使う支援者でも実施できるように、また生徒にもわかりやすく伝えられるように、このツールの使い方についても記載する工夫をしている。



このツールを用いて、アルコール健康問題予防啓発キャンペーンや出前講座等で、一般住民に対して啓発活動を行った。

2) アルコール健康問題予防啓発キャンペーン

平成 30 年 12 月 20 日に相馬市・南相馬市の商業施設 4 か所にて、上記のツールを一般住民へ配布した。このキャンペーンには、相馬広域消防署、相馬・南相馬警察署、相双保健福祉事務所、相馬市保健センター、原町保健センターにも協力を頂いた。



住民の多くはお酒について関心が高く、ツールを快く受け取っていた。日頃から飲酒量を意識して飲みすぎないように気を付けていることがわかった。

3) 出前講座での啓発活動

住民を対象に、アルコール健康問題に関する出前講座を 4 回実施している。上記のツールを活用しながら、体に及ぼす影響や参加者の飲酒量について確認した。また、アルコール体質試験パッチを用いて体質チェックを行うと、参加者同士の交流にもつながり楽しんで学ぶことができています。参加者からは、アルコール依存症のかかわり方について困っていることや、どこに相談したらいいのかわからないという意見があがる。実施した内容は以下の通りである。

(1) 浪江町住民による自主サークル勉強会（^{よしみ}淑美会）

平成 30 年 11 月 17 日（土）参加者 18 名 場所：浪江町地域スポーツセンター

(2) 浪江町いきいき交流会

平成 31 年 1 月 16 日（水）参加者 25 名 場所：浪江町地域スポーツセンター

(3) 家族介護教室（南相馬市委託事業）

お酒と認知症の関係について（依存症や認知症等）

平成 31 年 2 月 20 日（水）参加者 43 名 場所：道の駅「南相馬」

出前講座においては、一般住民が楽しくアルコールについて知ること为目标として実施した。一般住民の興味・関心を引き出すための工夫をしている。講義内容と工夫した点に関しては以下の通りである。

講義内容	時間配分 (計 90 分)	使用物品
1. アイスブレイク	10 分	
2. アルコールパンフレット説明	10 分	酒造会社作製のパンフレット
3. アルコールに関する基礎知識	20 分	精神保健福祉センター作製のパンフレット
4. 休憩	5 分	酒瓶や空き缶のサンプル
5. アルコール体質について知る	20 分	アルコール体質試験パッチ
6. 具体的な対応の仕方	15 分	
7. 質疑応答	10 分	

1. アイスブレイクでは、講義前の緊張をほぐすために、シナプソロジー（手指の運動）を実施している。体を動かし、笑いながら取り組むことによって、その後の講義が導入しやすく、かつ良い雰囲気を作り出している。

2. アルコールパンフレット説明では、フラッパー印刷された特殊なパンフレットを使用して、使い方の説明と内容について紹介している。内容としては 20 歳未満飲酒の問題点や対処方法を学べるものになっており、教育機関でも利



用されている。

3. アルコールに関する基礎知識では、参加者の興味・関心が持続できる時間配分とし、アルコールが脳に及ぼす影響や依存症や認知症などの関係について説明している。その際に精神保健福祉センターで作製したパンフレットを用いている。
4. 講義開始から 40 分を目安に休憩を入れている。この休憩時には、会場内に酒瓶や空き缶のサンプルを用意し、実物を見てアルコールのドリンク換算がイメージできるような展示をしている。休憩時に声掛けをして、展示物を見る時間も設けている。
5. 「アルコール体質について知る」では、アルコール体質試験パッチを用いて、参加者自身のアルコール体質を知る取り組みも実施した。試験結果が出るまで 20 分かかるため、その間に講義を再開し、1 日の飲酒量確認、AUDIT・適正飲酒量の説明を行う。
6. 具体的な対応の仕方では、CRAFT のコミュニケーション技法について説明している。ここでは概要のみ説明をし、参加者から対応について困っていることを発言してもらい、CRAFT の技法と組み合わせて助言をしている。

出前講座実施後のアンケート結果として、「CRAFT についてもっと知りたい」「アルコールを摂りすぎると脳が委縮していくことを知った」「今後のお酒の飲み方を考えさせられた」「相手を責めるような言葉は使わないようにしたい」「眠くならず最後まで楽しく講義を受けられたので、また機会があれば参加したい」などの意見があった。

4) 各種イベント等での啓発活動

地域で開催される交流会やイベント等においても、孤立しがちな中高年男性の居場所づくり「男性のつどい」に関する啓発活動を行った。今年度から新たに始まった木工作業に関しては、一般住民の興味・関心が非常に高く、活動の様子を動画・写真等で紹介している。また作品については、展示コーナーを設置したことで、手に取って眺める人も多かった（支援内容の詳細については「2.『男性のつどい』の活動強化」を参照）。



2. 「男性のつどい」の活動強化

本年度より「男性のつどい」は、季節のイベントや料理の活動に加え、孤立しがちな男性が木工製品の創作活動を通じて、自己肯定感を高めるプログラムとして「木工（きっこう）リーナ」を始めた。また、帰還した住民が参加しやすい環境をととのえるため相馬事務所から南相馬事務所に場所を変更し実施した。

1) 全体活動 「料理」

参加者の希望により食べたいものや作りたいもののメニューを決めて実施した。普段、



料理をする機会がなく、一人暮らしで偏った食生活になりがちな男性からは好評を得た。

「月一度でも自分で料理できる楽しさがある」「みんなで食べることはうれしい」「今日はお酒を飲まなくてもよい」など一人暮らしの男性の自己効力感を高める上でよい機会となっている。回を重ねるにしたがって、それぞれが自分の役割を認識しながらスムーズに進めたり、スタッフの助言なしにできるようになるなど主体性がみられるようになっている。

表1 「男性のつどい」 実施内容

月	参加人数	実施内容（メニュー）
4月	4名	花見 キャベツのミルフィーユ
5月	3名	ピザづくり
6月	5名	餅と豚汁
7月	5名	流しそうめん
8月	4名	B B Q
9月	5名	カレーづくり
10月	5名	芋煮
11月	6名	餃子づくり
12月	7名	鍋2種類
1月	7名	うどん打ち、けんちん汁
2月	5名	肉まんづくり
3月	6名	あるもので3品つくる 親子丼、けんちん汁、焼きそば

2) プロジェクト活動 「木工リーナ」

引きこもり傾向にある男性を対象とし、創作活動を通じ孤立化の防止や生きがいを得てもらうため「木工リーナ」を8月より開始した。実施にあたり助成金（特定非営利活動法人ジャパン・プラットフォーム「共に生きる」ファンド）で木工旋盤や切断器械を購入している。木材は森林組合から提供してもらった。

表2のように、第2・3・4火曜日 13:00～15:00 に月2回から3回実施した。引きこもりがちの男性を対象に参加を募った。

参加者の中には、入院中から退院後のリハビリの場として紹介されたり、自分が作ったものを形にすることを楽しみにしている方もいた。体調や気分を確認しながら行い、参加者が自ら身体の変化に気付ける場としての役割を果たしている。創作した作品の一部は、各市町村で実施する健康福祉まつりや事務所内に展示し、「自分が制作した作品を見てもらえる」など自己表現する一つの機会となっている。



表2 「木工リーナ」 実施内容

月	参加延べ人数	開催回数
8月	3名	2回
9月	7名	3回
10月	4名	3回
11月	10名	3回
12月	6名	3回
1月	5名	3回
2月	2名	3回
3月	6名	3回

3. 保健・医療・福祉関係者の支援力の強化

1) 雲雀ヶ丘病院での勉強会・事例検討会参加者からのフィードバック（聞き取りのまとめ）

平成26年度より実施してきた本勉強会・事例検討会を4年間、計8回開催したところで、今後の開催のあり方について検討するために、本会に複数回参加している方4名（精神科病院スタッフ2名・市町村保健師1名・一般科病院訪問看護師1名）にご協力頂き、本会に参加してみての感想や、参加によって変化したこと、今後への希望などをうかがった。その結果を、(1) アルコール依存症の勉強会・事例検討会がもたらしたものの、(2) 相双地域において展開しているアルコール依存症患者への支援へのコメント、(3) アルコール依存症の勉強会・事例検討会に望まれる在り方、(4) アルコール問題に関する相双地域での今後の課題の4点にまとめた。

(1)アルコール依存症の勉強会・事例検討会がもたらしたもの

<アルコール依存症に関する知識の獲得>

■アルコール依存症患者に対する理解の促進

「病院の職員さんたちは結構参加できたので、やっぱりアルコール依存症に対しての理解とかもすごく深まったし。やっぱり病気であって本人のせいだけではないとか、その他のことについてもうすごい分かってもらえたかな、って思うんですけど。」(精神科病院スタッフ)

「アルコール依存症に対する基礎知識というか、今の新しい治療、田先生からの話が、すごいなんか目から鱗と言うか。はあ、そうなんだみたいな。やっぱりあれが分かっていると分かってないじゃ、きっと病院に、例えば入院したときに、本人が自分で責めながらっていうか、どうでもいいんだっていう自分を責めるような。だけど肝硬変とかになって具合悪い、じゃあどうだったんだとかっていうときでも、理解するというか、その病態の理解をするのにも、すごくその知識って役に立つなと思ったし。」(一般科病院訪問看護師)

■アルコール依存症患者に対する偏見の軽減

「どっちかっていったらアルコール依存症って何か隠したくなるじゃないですか。そういう部分を、こういうふうに医療従事者の中でも話せるような雰囲気というか、そういうのって意外と私の中では、はあ、何か普通にやっぱり疾患として扱うというか、そういう自分の中にあったその偏見みたいなのも、医療従事者の中でも自分はあったなっていうのが第一印象で。」(一般科病院訪問看護師)

■一般科の看護師がアルコール依存症の知識を得ることでの対応力の向上

「アルコール、意外と聞いてるんですよ、私ら。アナムネのときに。毎日アルコール飲みますか、とかね。それって意外と気にしてないっていうか聞いてはいるんですけど、それを何につけて結びつけることがあまりなかったんです、私なんかは。どっちかっていったら埋めなきゃいけないから、とりあえずアルコール、毎日晚酌しますかって言ったらしますってなったときに、例えば毎日1合ずつとかって言ったときに、それがどういう意味をもたらすのかっていう。これが毎日飲んでた人が、1合って言ったらきっと2合とか3合飲んでるかなみたいな。そんな、それは毎日ずっと飲んでた人が、この、飲めなくなるってなると、どういうふうなことが起きるのとか。例えば何合毎日飲んでた人が何日間飲まなかった場合、やっぱりちょっとこうなりますよとかって分かっていたら、きっと入院の時点で、もしかしたらこの日入院してて、その前から飲んでなかったとしたらとかね。もしかしてなんか夜間ちょっと不穏になんじゃないとか。例えばですよ。そうすると予測をするっていうことで対応が違ってくるかもしれないし。」(一般科病院訪問看護師)

「今、総合病院の中での経験と自分を振り返ってみると、そういえばそんなことがあって、大変だ大変だってなんか手が震えてきたとか、いやなんかすごい汗かいてるんですけど。この人アルコール依存症なんじゃないなんて。もしかしてすごいいっぱい飲んでる人なんじゃないって。だ

って顔がさなんて言って。先生とかも縛ってあれして、点滴して、とりあえず出せみたいな。そうすると本当だったら、本人はもっとつらいのかもしれないとか。そういうふうに、どっちかっていったら面倒な患者から、もしかしたらきちっと理解をして、自分たちの面倒な患者じゃなくなれば、スタッフも実はそんなに大変じゃなくなるのかなっていう。管理者的な立場ですよ。ある程度予測してやれてたら、そういうことにも生かせるかな（中略）（患者も看護師も）両方幸せかなみたいな気になったりはしますね。」（一般科病院訪問看護師）

<事例検討を通しての支援力の強化>

■事例検討という場で様々な意見によって編み出される支援方法

「病院としてちょっと問題、課題となっているのは、なかなか退院した、するまでの間でどういったサービスとか、そこがやっぱり課題なので、そういったところはいろいろ相談する場とか話し合う場がある、っていうのは、一ついいことなのかなとは思いますが。人一人、一つの頭で考えても思いつかないことも、数人の頭で考えればこういった方法があるんじゃない、っていうのは出るのかなと。どうしても病院にいとその病院の枠だけで見ますので。」（精神科病院スタッフ）

「この勉強会に参加してる人たちが、関係機関というか、仲間というか、みんなで、とにかく考えるしか、やっぱり解決の道はないなっていうふうに思っていたので。そういう意味では、やっぱり何かないかな、何かないかなって、きっと思ってたんだと思いますね。それで来てたんだと思いますね。その中から少しヒントを得たとか。」（保健師）

■事例検討を通しての病院から地域への移行の促進

「関わっていただいていることで退院、っていうふうなことを周りに勧められる、関わってもらっているからこそですかね。逆に関わってもらっていないとその家族、本人、あとはこの病院で、病院の職員なんかで話して。家族は駄目です、病院はもう治療を終了してるので大丈夫です、本人も退院したいです。そうすると、そこで話が止まってしまうんですね。そこでやっぱり関わってくれる人がいることによって、こういったサービス、こういったことをしてもらえるよ、こういったことをやりますよ、っていうふうな情報なんかもいただけるので。」（精神科病院スタッフ）

<病院－地域での支援者のネットワークづくり>

■地域の中での連携の方法を模索

「自分の中では何となく、どこでなごみさんにあれしたらいいのかとか。そういうのはもしかしたらこれからの事例検討とかでも、お互いに出し合うというか。なごみさんの性的についていうか、専門的にはこういう段階で行ってもらったほうが良かったかなとか違うかなとか、私らもそこは意外と気が付いてるかもしれないじゃないですか。何かおかしいなとか。そのきっかけが意外と専門じゃなかったりすると分からないので。勉強してから思うことは、そういう視点が入ったが故

に、観察しててもこれどこでどういうタイミングで連携すると、本人にとってはいいんだろうかとか、その連携のために必要な信頼関係だったりとかそういうのはどうなんだろうとか。」（一般科病院訪問看護師）

■勉強会を通しての病院スタッフとなごみスタッフの関係構築

「はじめは、見たことはあるけど名前、何だっけとかっていう感じですけど、徐々に徐々にここで、こういったところで集まる、あとは病棟で顔合わせたときにちょっとあいさつするぐらいからですけど、そうするとやっぱりちょっと違います。」（精神科病院スタッフ）

（2）相双地域において展開しているアルコール依存症患者への支援へのコメント

■アルコール依存症患者に共に関わる仲間との出会いで支えられるやる気

「だからいろんな人の、そこを一生懸命、今、アルコールで苦しんでいる仲間ですよね。関係機関の仲間の人たちが、どんなふうに、そういうことを考えるかとか。死んでもいいんじゃないの、あんたたちなんてすぐ思っちゃうんだけど。ここまでやったのに、しょうがないよね、死んだら、しょうがないですよ。そこまでだとかって私が言うと、〇〇さん（なごみスタッフ）は、いやいやとかって言うし。あらそうなんて。仏の〇〇が言うんじゃないわねなんつって。やっぱり、やるしかないかみたいなこととか。あと、こうやったら、こうだったとか、本当に粘り強くかわる事例だとか、そういう報告を聞けば、いいかげんに考えてるのは、ちょっと心を改めて。」（保健師）

■この土地で展開されている“緩やかな支援”の意義の実感

「ここは、そんなに断酒会だのAAだの家族会だのっていうのはないから。病院でデイケア毎日やってるところもないし。だから、そういう意味では緩やかな、緩やかな支援っていうか、そういうのが効果があるみたいだなっていうのだけは、よくわかった気がしますけどね。」（保健師）

■「男性のつどい」の力

『男性のつどい』は、だからよかったですけどね、私はね。やっぱり、別にあんなにふるふる震えながら、おしっこをさせながらも、みんなが連れてきて。それでも、仲間だよっていうところとか、その人の輝いてたときを、やっぱりちらちら、あの会の中では、随分見ることができて。鹿狼山の山のてっぺんに神社があるんですよ。それをつくった人が来てたし。で、そこに自分の名前が書いてあるんだっつって、それで、ふだんあんまり歩けない人が鹿狼山の山に、『男性のつどい』で行って。おりてくるときなんか、本当お尻でおりてくるみたいな。それでもやっぱり、まあすごいね。もうみんなにすごいすごいつて言われて。結構よくなってますよ、その人。」（保健師）

■病院となごみとの連携による支援の継続

「やっぱり（地域で）関わってもらう人にはやっぱり（病院へ）来てもらいたいですし。そこでもう、例えば一定の期間、関係を閉ざしてしまうと本人のためにもならないので。先生方もやっぱりその辺りの考えは持っていて。例えば、一般の人の面会駄目なんですけどなごみのスタッフの方の面会はいいですとかっていう指示が出たり。（中略）入院中はこちらでも支援しますし、退院すれば支援して。だから、どちらも。スムーズにどちらも利用してる方からしたら、活用できるわけですから。」（精神科病院スタッフ）

■地域での対応による入院に至る患者の減少

「それだけ地域で何か関わってくれてるところがある、っていうことで、多分入院まではつながらずに、っていう、精神科への入院にはならず、っていうふうなところかなと。（中略）地域自体は多分減ってはいないと思うんですけど、入院、精神科病院への入院治療っていうふうな、新規での入院治療については少し減ったようなイメージはあります。」（精神科病院スタッフ）

(3) アルコール依存症の勉強会・事例検討会に望まれる在り方

- 何を学んでいきたいのかを現場に確認した上での内容の決定
- 継続的に繰り返して学んでいくことの大切さ
- 事例検討を通しての交流
- 現場で開催することによる参加者拡充（参加人数および職種の増大）
- 現場で中核となって動く人の設定（勉強会への毎回参加→積極的な関与）

(4) アルコール問題に関する相双地域での今後の課題

<アルコール問題に関する支援エリアの拡充>

- 避難指示解除地域でのサービスの充実
- 避難指示解除地域でのケースに関する事例検討

<より対応の難しいケースへの支援方法の検討>

- 基本的な対応だけでは対処できない複雑なケースへの対応方法
- 高齢者のアルコール依存症者への対応

<被災地で生じるアルコール問題の特徴を踏まえた支援方法の確立>

- 被災地であるこの地域の住民の心情を踏まえた支援の在り方
- 被災者のアルコール問題の特徴を踏まえた対応方法の検討
- この地域の状況にあった対応方法の確立

＜一般科病院のスタッフや地域の福祉事業所・行政機関のスタッフを対象とした勉強会の開催＞

- 退院後アルコール依存症患者に関わることになる福祉事業所・行政スタッフ等の対応力の強化
- 地域の相談員等へ働きかけることによる重症化する前の早期からの介入の促進
- 一般の病院の看護師等によるアルコール問題への関与の促進
- 一般科の看護師向けの研修会の開催

※一般科：精神科以外の診療科を示す

＜アルコール依存症患者の地域生活を支える仕組みづくりの強化＞

- アルコール依存症患者の居場所づくり・役割づくり
- 本人が選択できるような参加可能な様々なジャンルの活動の提示
- アルコール健康問題に関わるできるだけ多くの関係者が集える場の設置

＜支援者自身のエンパワメントを促すような取り組み＞

- 勉強会を通して看護師が地域の中で役割を果たしていると実感していけるような働きかけ
- 若い世代の看護師が育っていけるような種まき

2) 雲雀ヶ丘病院での勉強会・事例検討会の開催

平成26年度よりアルコール依存症患者および家族への対応や効果的な介入について学び、地域の対応力強化を図ることを目的とした勉強会・事例検討会を開催している。今年度は2回（平成26年度から通算、第9回目・第10回目）の勉強会・事例検討会を開催した。

(1) 第9回 平成30年11月1日（木）

講義テーマ：「アルコール依存症治療における“節酒”の位置づけ」（資料1）

駒木野病院 アルコール総合医療センター

医師 田 亮介先生

看護師 菊地 達樹先生

事例検討会：訪問看護ステーションなごみの訪問ケース

「節酒を守っている地域のアルコール依存症患者の事例」

参加者： 講義38名、事例検討会20名

(2) 第10回 平成31年2月28日（木）

講義テーマ：「今日からできる動機づけ面接～入門編～」

動機づけ面接トレーナー

東北会病院 作業療法士 金田 和大先生

精神保健福祉士 齋藤 健輔先生

参加者： 28名

当初 3 年 1 クールと考えると始まったアルコール対応力強化事業の一環である勉強会は、5 年目の今年、引き続き 20 名以上の参加者を維持できた。

第 9 回目の講義では、雲雀ヶ丘病院からの希望により、新たなアルコール依存症への支援方法である“節酒”療法が、従来の“断酒”療法や底尽き体験に対してどのような位置づけにあるのかを題材にして講義を行った。30 名以上の参加者からの活発な意見交換の機会もあり、それぞれの参加者にとって新たなアルコール依存症へのアプローチを学ぶ実りある勉強会になったと考えられた。また、事例検討会では、雲雀ヶ丘病院から訪問看護に繋がったケースが紹介され、病院から地域への支援のつながりの中で、地域へ戻った対象者への支援のあり方をお互いに考える機会を得ることができた。

第 10 回の勉強会では、昨年度まで夏に 2 日間にわたる研修会を行っていた動機づけ面接の研修を、入門編として紹介した。参加者が主体的に参加できるワークショップ方式を取り入れることで、参加者一人一人に能動的に動機づけ面接を体験してもらい、その技術を実感してもらった。参加者からのアンケート結果では「今後の支援にすぐに活かすことが出来ると感じた」という意見が多数あり、継続的な勉強会の開催を望む声が多く聞かれた。



第 10 回の勉強会の様子

3) ふくしま MI 勉強会との協働

今年度、地域における継続的な動機づけ面接の勉強会として、なごみスタッフが中心となり、ふくしま MI（Motivational Interview：動機づけ面接）勉強会を立ち上げた。日々の実践を振り返りつつ、動機づけ面接を使って支援していく方法を、月 1 回、有志で集まって勉強を続けた。

そのふくしま MI 勉強会が主催して、12 月 15 日（土）に福島県立医科大学で「動機づけ面接研修会」を開催した。初めて企画する研修会であったが、福島県内の病院、大学、訪問看護ステーションから看護師、心理士、作業療法士など多職種 30 名の参加があった。

なごみでも、この研修会の企画、運営に協力した。

4. 地域連携の強化

1) 「地域でのアルコール健康問題について考える集い」の開催

昨年度まで関係者会議として開催してきた会議を、本年度より「地域でのアルコール健康問題について考える集い」として、平成 30 年 11 月 1 日（木）、南相馬市消防・防災センターで開催した。今年度より、医療・保健・福祉関係者のみならず、地域でアルコール問題を抱える方々を支えている多くの関係者に参加対象者を広げて参加を募った。その結果、断酒会、

AA、相双地域の各保健センター、社会福祉協議会、福祉事業所、医療機関、教育機関など多方面から 30 名の方々にご参加いただいた。

はじめに、駒木野病院 アルコール総合医療センター センター長の田亮介医師を招き、「アルコール依存症の支援のあり方」について講義を行った（資料 2）。その中で、アルコール依存症の病気としての位置づけ、支援者の対応の原則、治療方法などを学んだ。それにより、地域の中でアルコール依存症の方々に対応するためには、医療だけではなく、多方面から継続的に支援していくことの重要性を再確認した。



次に当法人の理事長 大川貴子が、昨年度までのアルコールプロジェクトの取り組みを振り返り、今年度の「やってみる！出向いていく！つないでいく！」のスローガンのもと新たな取り組み計画について説明を行った（「I-1. 本事業の枠組み」を参照）。

会の後半は、4 つのグループに分かれて「地域の中でアルコール健康問題へ対応していくためには何が必要か」をテーマにディスカッションを行った。どのグループでも活発な意見交換が行われた。

今回行ったアンケート結果から、以下のように今後の地域連携活動に関する具体的なアイデアをもらうことができた（表 3）。

表 3 地域連携に関するアイデア

参加者からの具体的な提案	なごみの施策	これまで	これから(将来的に)
アルコール電話相談	アルコール専門対応		
様々な多くの人に知ってもらえるような活動	啓発活動の強化	研修会、サロンの開催	活動の継続
地域にいつでも集える場	場所提供	男性のつどい、木工リーナ	集いの継続
アルコールに関する勉強会	勉強会の企画・開催	MI 勉強会	MI 勉強会の継続
啓発キットの作成	教材の開発	教材のパッケージ化	
相談できる場所（困っていることを声に出るように）	相談窓口(なごみ)の周知		広報活動を強化
地域ぐるみでのかわり	地域連携	「地域でのアルコール健康問題について考える集い」の開催	かかりつけ医との連携の模索

2) 教育機関との連携

(1) 高校生へのアルコール健康問題に関する教育

- 福島県立相馬高等学校 3 年次保健講話（高等学校からの依頼）

平成 30 年 7 月 12 日（木） 参加者 194 名 場所：福島県立相馬高等学校

- 福島県立相馬東高等学校 3 年次保健講話（高等学校からの依頼）

平成 31 年 1 月 29 日（火） 参加者 146 名 場所：福島県立相馬東高等学校

(2) 高等学校養護教諭との意見交換（養護教諭部会からの依頼）

- 平成 31 年 2 月 9 日（土） 場所：福島県立相馬東高等学校

3) 断酒会の開催支援（「相馬うぐいす断酒会」への会場提供）

本年度は、前年度に続き「相馬うぐいす断酒会」の例会の開催場所として、相馬事務所を提供した。第 2、4 土曜日の 13:00～15:00、計 23 回、延べ参加者数は 50 名であった。本人以外の家族からの相談もあり、アルコール関連問題の相談の場としての機能を果たしている。

「相馬うぐいす断酒会」は、次年度より相双地区唯一の精神科病院の雲雀ヶ丘病院との連携を深めるため、開催場所を相馬事務所から南相馬市事務所に移動して開催することと、夜間しか参加できない住民を考慮し、夜間の開催を計画している。なごみとしては、会場提供を含め継続的に協力していく予定である。

Ⅲ. 今年度の振り返りと次年度に向けて

平成 26 年度より展開してきた本事業について、今年度は枠組みの見直しからはじめた。4 年間の開催を通して、何を主軸にしながら活動を行っていくのがよいのかを考え、冒頭に記載したように、「やってみる！出向いていく！つないでいく！」というスローガンを掲げることにした。そして活動内容を整理して、その主軸を、①地域住民への啓発活動の促進、②「男性のつどい」の活動強化、③保健・医療・福祉関係者の支援力の強化、④地域連携の強化の 4 つに整理し、展開していくことにした。これらを定めるにあたっては、昨年度実施した雲雀ヶ丘病院での勉強会・事例検討会に複数参加された方々から頂いた“声”を反映させた。この地域においてアルコール健康問題への対応力を高めていくためには、機関、職種、エリアなどを超えて、様々な立場の人々が一緒に課題を共有し、どうしたら良いかを考え、共に取り組んでいくことの重要性が確認された。そのための場づくりや、知識を得たりや技術を習得するための機会づくり、得た知識や技術を使いながら地域住民に還元していく取り組み、そしてアルコール依存症患者が地域で生活していくために欠かせない居場所と役割づくり、このようなことを念頭に置きながら、今年度の活動を開始した。

「地域住民への啓発活動の促進」については、一般の住民の方にどのような教材を使ってアプローチしていくのがよいかを吟味し、教材のパッケージ化を行った。パッチテストを行ったり、クイズを取り入れるなど興味をもってもらえるような工夫をすることで、楽しみながらアルコールとの付き合い方を学んでもらう機会をつくることができた。今後は、アルコール依存症患者や家族に対する対応方法として支援者が学んでいる動機付け面接や CRAFT（クラフト）で用いられている技法なども取り入れながら、内容を充実させていきたい。

「『男性のつどい』の活動強化」については、男性が興味を持って参加することを目指して木工を取り入れた活動を行ったり、アルコール依存症患者の抱える栄養の偏りなどへの働きかけも考えての食事づくりを取り入れた展開などを行った。関係機関の方々が本活動に関心をもって下さり、紹介して下さることもあり、参加人数が増加した。特に雲雀ヶ丘病院との連携が強まり、入院中から本活動への参加が行われるようになった。今後は、南相馬事務所での開催に加えて、他の地域へも“出向いていく”出前型の開催を検討していきたい。

「保健・医療・福祉関係者の支援力の強化」については、知識・技術とも繰り返し学習する場を設けることの大切さが確認された。今年度は、動機付け面接のワークショップを雲雀ヶ丘病院にて開催したが、楽しみながら学ぶことができ、とても好評であった。次年度以降も、引き続き体験型・参加型の学習の場をつくっていきたい。

「地域連携の強化」については、前年度まで開催していた「関係者会議」を拡大して「地域でのアルコール健康問題について考える集い」を開催し、参集範囲を拡大した。この会を行うことによって、関係機関とのつながりの幅が広がり、アルコールに関する問題の相談先として「なごみ」の周知が図られた。その結果として、アルコールの問題を抱えたケースの相談件数

が増加してきている。今後も、このような会を継続的に行い、さらに関係者の層を厚くしていきたい。また、精神科以外の医療機関との連携を図りやすくしていく取り組みも行っていく必要があり、震災前より地元精神科医らによって活動されている「薬物懇話会」との連携を模索し、そこから、住民の方々のかかりつけ医を含めたネットワークづくりにも着手していきたいと考えている。